

たのは、私は初めてである。

沢はますます細くなった。ここまできたら真名子川の水源を確かめてやろうとブッシュもかきわけ進む。10:05ようやく源頭。真名子川の水源は、湿地帯からしみ出る微量の水であった。(記)

[タイム] 遡行開始(6:45)→ニの沢出合(7:00, 8:30)→ホの沢出合(8:40, 9:15)
→への沢出合(9:20, 9:40)→遡行終了(10:05)→林道(10:10)

真名子川支流イの沢(仮称)中俣, 右俣, 左俣

1990年9月9日

9:10, イの沢(仮称)中俣めざして下降開始。10分程で小さな湿地に出る。ここから小沢の流れが始まった。流れについて下り始めるとすぐ4mの滝。倒木を使いながら左岸を下る。このあとしばらくは平凡となった。

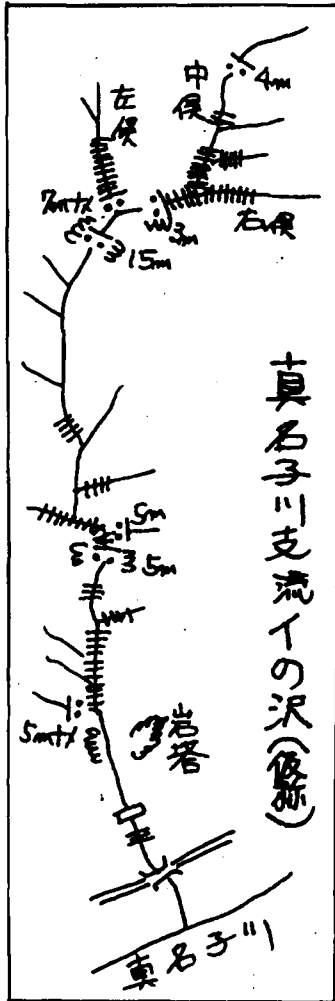
やがてナメが出てくる。源流部の手前に長いナメというのは、このあたりの沢のパターンのようである。ナメを10分程下ると右俣出合。水量は中俣の5分の1程度で沢幅も貧弱であるが、沢床は右俣の方が低い。鉄分を多く含んだ水が流れている。右俣はしばらくナメが続き、その先はブッシュの中に消えていた。

右俣の偵察から戻って下降再開。すぐ3m程のナメ滝をクライミングダウン。そしてその先で左俣が合流するが、そのあとは足元が突然スッパリ切れ落ちて、15mの滝となっていた。やはりこの沢にも滝があった。

滝をどう下ろうかと思案する前に、左俣をつめてみることにする。左俣は沢床こそ中俣より高いが、水量は倍ほどある。出合の7mナメ滝は、フリクションをきかせて楽に登るが、帰りはクライミングダウンに少してこずった。この左俣もずっとナメが続き、そしてナメが切れた時には、沢はもう樹林帯の中の細いミゾでしかなくなっていた。

再び滝の上まで戻って下降ルートを探す。左岸から捲いて下ることにしたが、途中で岩場に行き当ってしまい、シュリング1本を残置して、ようやく下りおえる。滝の下流は平凡な河原となっていた。

しばらくノンビリ歩いていたら、再びナメ床となり、足元が切れて5mの滝となる。隣接する千歳川流域と同じようにこの真名子川流域も滝の下は平凡な河原が続くだけで、真名子川本流との出合まで何もないだろうと勝手に思い込んでいただけに、とても素敵なプレゼントをもらった気分となった。ところでこの滝は



下れない。右岸から捲く。下り終えて見上げると、左岸から登れるような気がした。しかしかなり微妙な感じである。

あとはもう平凡な河原歩きとなる。蛇籠でできた砂防ダムを越すと真名子川本流は間近であった。

[タイム] 下降開始(9:10)→右俣出合(9:45)→右俣終了(9:55)→左俣出合(10:00)→左俣終了(10:10)→下降終了(11:40)

真名子川支流口の沢(仮称)

1990年10月21日

10:50口の沢(仮称)源頭めざして下降開始。急斜面のやぶを下ると口の沢(仮称)源頭となる。この水源も落葉の下からしみ出る水であった。このあとすぐナメとなる。滝はどうかと期待して下ったら、出てきました30mの滝。上部はナメ状で、ブッシュをつかみながら下ったが、最後の15m程は懸垂下降ほかなかった。下りおえて振り返ってみると、左右から合流する支沢にも20mの滝がそれぞれかかっている。

20mクラスの滝が標高700m程の位置に必ず存在する。この沢も例外ではなかった。

[タイム] 下降開始(10:50)→下降終了(11:45)

真名子川支流ハの沢(仮称)右俣, 左俣

1990年9月9日

真名子川林道の終点にて仮眠。午前7時より行動開始。林道は、地図にあるより奥、ハの沢(仮称)出合の少し先まで入り込んでいた。

